●「まいど」は「まいど、おおきに」の省略形、タイトルの「まいDO!」は心を込めた行動形。

まいDO!

第86回自治労定期大会大阪実行委員会
〒530-0041 大阪市北区天神橋3-9-7 PLP会館1F
●Tel 06-6242-2233 ●Fax 06-6242-2230

自治労大阪大会ニュース

3号 2013年6月1日発行

大阪国際会議場「グランキューブ大阪」などで事前会議

活発な討論と立体的な意見交換の場に

自治労定期大会の前段に行われる事前会議（各職能評議会などが開く定期総会など）が、大阪国際会議場（愛称：グランキューブ大阪）で開かれる。この建物は国際都市大阪にふさわしい国際会議場をと計画・建設されたもので、2000年４月にオープンした。会場には最大2754人収容可能なメインホールをはじめ、10人から1000人まで対応できる会議室があり、今回の事前会議はほとんどここで開かれる。会議場としては申し分ないが、難点は周辺がビジネス街ということだ。会議終了後の懇親会などは一足延ばしてＪＲ福島駅辺りがお勧め。居酒屋はもちろんイタリアン、フレンチまでと多様な店でにぎわっている。気さくで親しみやすい店内で大阪らしさを味わってほしい。

会場は、リーガロイヤルホテル大阪や京阪中之島線「中之島駅」と隣接、またJR環状線「福島駅」やJR東西線「新福島駅」からも徒歩10分圏内とアクセスは比較的スムーズ。ただ大阪の夏は「暑すぎる」ため、短時間でも移動中の水分補給を忘れずに

まっせ やって

元気はつらつ単組めぐり……大阪市職

商店街に市民との交流スペース「みつや交流亭」を店開き

三津屋商店街は、阪急神戸線「神崎川」駅から、うねうねと蛇行しながら南へ伸びる、「昭和」の香りを残す下町の商店街だ。その南の端あたりに「みつや交流亭」はある。2007年８月、もと和菓子屋さんだった店舗を改修し市民交流スペースとして開店した。

「みつや交流亭」が地域の町会、子ども会、商店街、小学校などと取り組む「三津屋音楽祭」。存続を訴える大阪市音楽団の有志の皆さんも、毎年参加しています

当時、「厚遇批判」など厳しいバッシングに遭っていた大阪市職が、「役所のカウンターを越えて、“市民”の中に飛び込もう！」と決意し、その思いに応えてくれた人たちとともに開店にこぎつけたものだ。

以来、昼間は子育て親子の集う場に、夜はミニコンサート・落語会・講座などの場にとにぎわう。合言葉は「動機は不純。終わってから皆でうまい酒を飲む」と肩ひじ張らない緩めの市民協働をめざしてきた。

間もなく６年。おかげさまで地元の皆さんにも可愛がっていただけるようになり、３年前にはNPO法人格も取得した。妙な市長の登場でユニオン・バッシングは今も厳しいが、フェイス・ツー・フェイスで築いた信頼は揺るぎない。

ほんまかいな大阪

今なお 民衆から深い共感！大塩平八郎

天保の大飢饉の際、困窮する民を救済しようと立ちあがった大塩平八郎は、元与力で陽明学者だ。自宅に開いた私塾「洗心洞」で多くの門弟を教え、また与力時代には汚職など奉行所内の不正を次々と暴きと市民から尊敬を集めていた。

1833年から始まった飢饉は1836年には大坂でも餓死者が出るほどに。大塩は奉行所にさまざまな救済策を進言するが、奉行はまったく取り合わなかった。

そんな為政者や米を買い占めていた豪商たちに憤慨した大塩は、私財をなげうち１万人の貧民に金を配布、檄文をまいて蜂起した。これが世に言う大塩平八郎の乱だ。自宅や与力・同心屋敷に火を放ち、駆けつけた農民とともに富豪宅を次々と襲撃、町を火の海とした。裏切りに遭いわずか半日で鎮圧されたが時の権力を大いに脅かした。大火で大勢の民が焼け出されたが大塩を恨む声はなかったという。

成正寺（大阪市北区）の境内に建つ「大塩平八郎の乱（天保8･1837年）に殉じた人びとの碑」

御堂筋

御堂筋秘話

筋の通った

イチョウ並木の御堂筋は大阪のメインストリート。車がひっきりなしに走る重要な幹線道路だ。今日のこの姿を見据え、困難を越えて建設に邁進した歴史がある。

●完成した御堂筋（北方面を臨む）。その沿道には名前の由来となった南御堂（手前）、北御堂（奥）が並んで建っている

拡張工事前はわずか三間（5・4メートル）しか幅のない狭い道だった

三間幅の道路を一挙に8倍（43.6メートル）に

「船場の真ん中に飛行場でもつくる気か」。御堂筋の拡幅工事計画が公になったとき、人びとからそんな声が上がった。それもそのはず、それは道幅5.4メートル、長さ約1.3キロの狭く短かった御堂筋を幅は８倍の43.6メートルに、全長は約４キロに広げようという途方もない大事業だったからだ。

事業を押し進めたのは第７代大阪市長関一（せきはじめ）。これは彼が作った「都市大改造計画」のメイン事業で、御堂筋拡幅工事と同時に道路の下には地下鉄も走らせるという、まさに100年先の大阪を見据えたものだった。

完成までにはさまざまな困難が

とはいえ工事にはさまざまな問題があった。まずは莫大な工事費用。世界恐慌や関東大震災の影響で国からは十分な予算が得られず、苦肉の策として導入した「受益者負担制度」は市民から猛反発を受けた。また沿道の住民にも立ち退きを求めねばならず、同意を得られるまで何度も頭を下げてまわったという。

同時に始まった地下鉄工事も大阪の軟弱な地盤にトンネルを掘るということから困難を極めたが、1933（昭和８）年５月、梅田と心斎橋を結ぶ路線が完成、日本初の公営地下鉄となった。

御堂筋の完成は地下鉄に遅れること４年、1937（昭和12）年５月のことだ。電線全てを地下に配し、イチョウ並木を植えた開放感あふれる美しい道となり人々を驚かせた。

大空襲の夜、とっさの機転が命を救った

戦時中の逸話がある。大阪大空襲の夜、地下鉄が人々を救ったというのだ。空襲で燃えさかる街から御堂筋に逃れてきた人々はさらに地下鉄の駅へ、そこに到着した電車に乗り梅田に避難したという証言がいくつも残っている。だが正式な記録はない。たぶん職員がとっさの機転で人々を救ったのだろう。

シンボルストリートが示す都市のあるべき姿

御堂筋は都市のあるべき姿を示した「大阪の道」だ。今や大阪のシンボルストリートであり、その美しさから日本の道100選ともなった。

天井はアーチ型、シャンデリア様の照明やエスカレーターが備わるなど豪華で近代的な駅に人々は驚いた（地下鉄心斎橋駅）

地下鉄完成間近、地下を走る車両の運搬は、車はもちろん牛までも借りだして街中を運ぶ大がかりなものとなった

※資料写真（4点）はいずれも「写真で見る大阪市100年」より